

©東京新聞2012年11月21日

独居の認知症

Dr. 松井英男の在宅医療のカルテ

高齢化に伴って、認知症患者が増えています。九月現在の六十五歳以上の人口は三千七百万人以上の患者がいることになります。

高齢化に伴って、認知症患者が増えています。九月現在の六十五歳以上の人口は三千七

省に勤めていたキャリアウーマンでした。自宅には、異国で撮られたであろう、赤いコートを着てさつそうとした姿の写真が飾っています。いつもその写真の説明をしてくれるのですが、B子さんにとってそれはつい最近のことのようです。

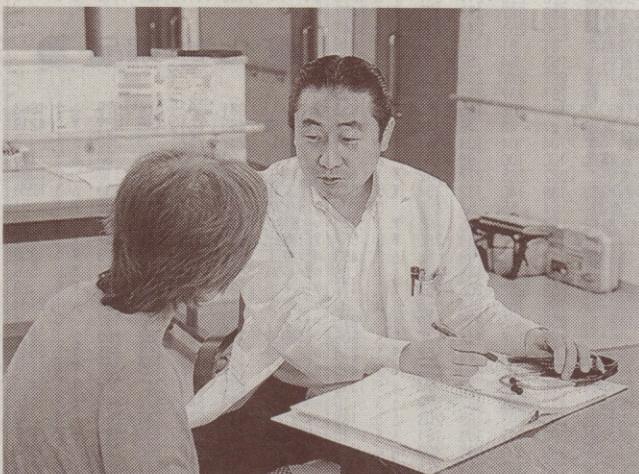
ご主人を十年以上前に亡くし、一人暮らしをしていたので、誰も認知症の発症に気づけませんでした。夏の暑

ご近所や交番も手助け

い日、道端で倒れているところを発見され、救急車で病院に運ばれました。熱中症で入院して点滴治療を受け、自宅に戻りました。認知症の診断はこの入院によって、初めてなされました。私たち

の訪問診療もこの時から始まり、内服治療を始めたのですが、本人に病気という自覚がないため、冷蔵庫に薬がたまつていきました。

ヘルパーによる薬の内服の介助が必要でし



グループホームを訪れる松井英男院長=川崎市で

た。安否は電話とご近所の方の声掛けで確認しました。近所の交番にも事情を話し、徘徊の時には連絡してもらうことになりました。このように、独居の認知症患者の在宅ケアには、医療だけでなく、さまざまな人の援助が必要になります。

B子さんはある日、

自宅で転倒して腕を骨折。日常生活が困難となり、グループホームに移ることになりました。引き続き訪問診療を行っていますが、一人暮らしの時の不安そうな表情は消え、時おり笑顔も見られるようになりました。

(川崎高津診療所院長)

|| 次回は十二月十一日

生活